

現代中国の形を作り上げている原動力は主に2つある。1つは民族平等、社会的・経済的平等を目指した民主主義革命と社会主義革命であり、もう1つは市場経済の原理がともなうグローバル化であるといえよう。

前回の共同研究『中国の社会変化と再構築——革命の実践と表象を中心に』(代表：韓敏 2004-2007)は、20世紀の辛亥革命と社会主義革命を中心に中国社会の再編成を検討し、「近代中国の革命を単に歴史の出来事としてみるのではなく、一つのシステムとして見なし」、社会主義革命の言説や諸制度の生成過程と表象、革命的諸制度と言説における従来からの連続性と断絶性、グローバルの時代における革命的言説・諸制度・表象の新たな展開と再構築といった3つの問題を解明した(韓 2009:2)。

今回の共同研究は前回の成果を踏まえ、現代中国を形作ったもう1つの原動力であるグローバル化に焦点を当て、政府主導の中国的ローカル化、企業や個人などが主体となるローカル化の実態と問題点を検討する。研究班はさまざまな年齢層からあつまった20人の人類学者によって構成され、政治・経済・文化の均質化が進む背景と「和諧社会」の国策の下に、民間・地域・民族・国家の歴史、民俗習慣、価値・知識体系が如何に競合し、再構築され、発信されているのかを取り上げ、中国におけるグローバル化とローカル化の同時進行の仕組みを考察する。

グローバリゼーションは通常近代の国家主義に対する新たな動きとされ、「輸送手段やメディアなどの発達によって、人・モノ・資本・情報の流れが地球規模で進み、その結果もたされた「時間と空間の圧縮」により、世界各地に密接な相互関連が生じた20世紀末以降の状態または過程」として理解されている(桑山 2002:54-55)。一方、歴史的プロセスであり、大航海時代以来の脱地域化、フラット化として理解する学者もいる(ロバートソン 1997;Friedman 2005)。ハーバード大学の人類学者ワトソンは歴史の視座に立脚しながら「グローバリゼーションは日常生活の体験が地球レベルで標準化される過程である。商品とアイディアの拡散がその特徴である」と指摘している(Watson 2002:133)。上記のようにグローバル化の現象として標準化、フラット化、脱地域化、脱国家化、脱中心化、クレオール化などさまざまなとらえ方がある。

グローバル化によって世界が均一な文化に覆われているようでありながら、人々はローカルな環境のなかで、民主、エコ、市民社会、NGOなどのようなグローバルな概念を再編成しつつ、自分らしさ、地域性、エスニシティ、ナ

ショナリティ、ルーツ、真正性などを意識し、再構築してこうとしている。このようなグローバル化の過程で立ち上がっていく動きをグローカリゼーションという。

オックスフォードの新語辞書によると、グローカリゼーションは、グローバルな視点からマーケットを考えると同時に、ローカルな考え方にも適応させることも視野に入れることを意味し、外国に進出した日本企業の「土着化」概念に由来する。そもそも地方の条件に応じて農耕技術を適応させるという農業の重要な原則であった土着化は日本のビジネス業界に借用され、ローカルな条件に合わせるグローバルな見通しという意味で使われていたが、1980年代後半から90年代初期にかけて、西側の会社は日本企業の土着化の成功例をみて、グローバル・ローカリゼーションと表現するようになった。のちにその表現はグローカリゼーションになった(Oxford Dictionary of New Words 1991)。現在、グローカリゼーションは人文社会科学の分野で「世界化と地方化の同時進行」(ロバートソン 1997:16)、「均質化と差異化の同時進行」(山下 1996:23)の意味として使われている。人文社会科学分野に早くからグローカリゼーションの概念を導入したロバートソンは、日本語の土着化の用語から刺激を受け、世界の同質化と多様化といった知的な衝突の現状を表すためにこの概念を採用した。現在ますます多くの人々がグローバルにかつローカルに考えかつ行動するようになっており、世界中あちこちで見られている伝統復興、真正性や土着性への関心と追求は、「グローバリゼーションの衝撃に対する反動」であると同時に、「グローバリゼーションによって創出されたもの」でもある(ロバートソン 1997:15-16)。

本共同研究は、上記のようなグローバル化とグローカリゼーションの概念を援用し、以下の2つの命題を中心として中国にアプローチしていきたい。

- (1) グローバル化の刺激を受けながら、中国化・民族化・地域化・個人化といったさまざまなレベルのローカル化の実態とメカニズムを解明する。
- (2) グローバル化の「競技場」において、地域的、民族的、中国的なモノ、価値、アイディアなどを発信する可能性とその実態を射程に入れる。

上記の2つの命題を解明するために、ローカル化の時代性と主体性に注目し、それに基づいて、さらに4つの問題群を想定している。

第1問題群：20世紀前半の中国における外来文化の流用・翻訳的適応・土着化

第2問題群：政府主導のナショナル・エスニック・ローカル文化の再構築

第3問題群：企業主導あるいは市場原理にのっつた文化のハイブリッド

第4問題群：民間あるいは個人主導のグローカル化

第1問題群は、19世紀から20世紀前半までの中国のグローカル化に焦点を当て、上海租界の劇場や学校の音楽教育から西洋音楽の受容、上海租界と都市文化の関連性(井口淳子)を検討すると同時に、ナショナリズム、クリスチャリズム、コロニアリズムの3つの異なるアプローチから近代中国の

民族学の形成を分析し、欧米学問である民族学の受容と土着化のメカニズムを解明する予定である(中生勝美)。

第2問題群はグローカル化の主体性に注目し、中国政府と地方政府の文化戦略を明らかにし、中国化・民族化・地域化の局面と文化ナショナリズムの実態を解明する。国家枠組みの中で社会主義革命を行ってきた中国は、脱国家化のグローバルな時代においても、国家が依然として社会と文化に対して強い影響をもち続けている。たとえば、中国政府は祭孔大典と儒教(秦兆雄)を選択的に復興させたり、中国共産党革命の記念日と伝統的年中行事の祝祭日(謝荔)を調整したりして、グローバルな競技場における中国文化の競争力と、国内の社会秩序の再編成に必要な文化的求心力を高めようとしている。一方、地方政府は中央政府の文化政策に同調しながら、地域の沙田民歌(長沼さやか)、項羽祭祀のような民間信仰(韓敏)を文化遺産化し、繡球によるエスニックシンボル(塚田誠之)を創出することによって、地域文化の再編成を行っている。

第3問題群の目的は、企業主導あるいは市場原理にのっつたグローカル化の実態を解明するものであり、具体的に葬儀産業化による死の文化の多元化(何彬、田村和彦)、世界的ネオリベラリズムにおける中国宗教の市場経済化(清水亨、渡邊欣雄)、農民画(周星)や銅像(高山陽子)の、プロパガンダ芸術から観光商品・観光名所への遍歴を考察する。

第4問題群は、民間あるいは個人主導のグローカル化の実態を扱っている。フリードマンが19世紀以前のモノ、20世紀のカネの交流と比べて、21世紀のグローバル化の特徴

は個人が世界を「フラット」なものとして生きる時代と指摘したように(Friedman 2005)、人の交流が中心となる21世紀においてグローバルな場での出会いは、他者の社会、文化に触れることによって自らの文化に存在する「伝統」を再発見するという事態を生じさせている。班員は中国の住民自治(澤井充生)、1990年代以降中国社会に現れたNGOの組織と実践(思沁夫、高明潔)、家屋形態(川口幸夫)や宗族の

祖先祭祀空間の再編(潘宏立)、少数民族地区における経済発展(横山廣子)を通して、草の根のレベルにおけるローカル化の実践を議論する。

平成20年10月からスタートした本研究は5回の研究会を開催し、12人の研究

者が発表をした。人類学に限らず、民俗学、歴史学、民族音楽学分野の専門家も入っている学際的研究チームであり、研究対象は東北、華北、華中、華南、西南の都市部と農村、漢族と非漢族を含む。中国の事例研究を通して、人類学のグローカリゼーションの研究に新たな視座と枠組みの提示を目標としている。

【参考文献】

- 韓敏編 2009『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』風響社。
- 桑山敬己 2002『グローバリゼーション』綾部恒雄編『文化人類学最新術語100』pp.54-55 弘文堂。
- 山下晋司 1996『序 南へ!北へ!: 移動の民族誌』青木保ほか編『岩波講座文化人類学第7巻 移動の民族誌』岩波書店。
- ロバートソン,R. 1997『グローバリゼーション:地球文化の社会理論』阿部美哉訳 東京大学出版会。
- Friedman, Thomas. 2005. *The World Is Flat: A Brief History of the Globalized World in the Twenty-first Century*. Farrar, Straus and Giroux.
- Oxford Dictionary of New Words*. 1991. Glocal. Oxford University Press.
- Watson, James. 2002. Globalization and Culture. In *Encyclopedia Britannica* (revised 15th edition).

かんびん

民族社会研究部准教授。専門は文化人類学・中国研究。著書に『回廊 革命と改革：皖北李村的社会変遷与延続』(江蘇人民出版社 2007年)、*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58 2001)、編著に『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』(風響社 2009年)、『大地は生きています：中国風水の思想と実践』(共編てらいんく 2000年)など。



共同研究会のメンバー (2010年6月27日、撮影：姜娜)。